

都鳥 拓也さん 都鳥 伸也さん (平成13年卒)

映画監督・プロデューサー

◇お仕事の内容を教えてください

有限会社ロングランという企業の映像メディア事業部で、映画製作、映像制作の仕事をしています。主に監督(演出)を弟の伸也が、撮影、編集などの技術面を兄の拓也が、という役割分担になっています。その他、二人共同で映画製作のプロデュース部分も担当しています。



◇仕事を通じどんなことに喜びを感じますか

まずは映画を製作している際に感じるものとして、撮影中に渾身のワンカットを撮影出来たときの喜びや、編集の際に思いもよらなかった発見をしたとき(脚本のないドキュメンタリー映画の製作時に多いのですが)の喜びなどがあげられます。それから、映画製作を通じて、たくさんの人と知り合えるのも映画製作の醍醐味だと思います。

そして、長い時間をかけて製作した映画が完成し、上映してたくさんの人たちに見て頂けたときの嬉しさというのは他に代えがたいものがあります。

特に良い評価を得た際には、製作費の調達から撮影、編集、仕上げ、宣伝と映画を作って公開するまでに重ねてきた数々の苦勞が報われたように感じます。

シネコンにかかるようなメジャー映画と違って、私たちのようなインディペンデント作品では、上映会等の際にお客様と交流する機会も多く、そうした際に直接、「良かったよ」と声を掛けられたり、映画のご感想を直接聞かせるのも喜びのひとつですね。

そういう意味では、映画はお客様のもとに届いて初めて完成すると言っても過言ではありません。

また、企業PR映像や企業案内映像、商品紹介映像などクライアントのある仕事の場合は、発注してくれた方々にご満足頂けたときに喜びを感じます。

◇将来の夢を教えてください

私たちは今、岩手から全国へと映画を発信しているわけですが、それが普通となる日が来るのが夢です。

私たちが初めてプロとして映画を作り始めた16年前とは、だいぶ変わってきたと思いますが、残念ながら今でもメディアや文化の中心は東京です。ですが、インターネットも発展し、どこにいてもつながれて様々な活動が出来るようになった今、地域に住みながら、その地域の魅力を発信していくことが出来ると思います。また、私たちは沖縄で米軍基地問題についての映画も作っていますが、東京の製作会社の人たちが地方ロケを行って、全国各地で映画を作っているように、岩手に拠点を置きながらも沖縄で映画を作ったり、東京で映画を作ったりというようなことをやってもいいんだと考えています。

どんどんボーダレスになり、私たちのように地方に住みながら、全国に目を向けた製作者が増え、活力ある日本になってくれたら嬉しいです。

◇専大北上高校ではどんな高校生活を過ごされましたか

今、大人になって再会した同級生たちに聞くと、みんな口を揃えて「真面目だった」と言いますね（笑）
私たち兄弟は、小学6年生の頃から市販のビデオカメラで自主製作映画を作っていたので、専大北上高校に入学した頃には、すでに映画製作歴5年目ぐらいでした。家庭訪問に来た担任の先生に自分たちの作品を見て頂いたのを覚えています。

小中学生の頃は怪獣のソフビ人形で怪獣映画を作っていましたが、高校生になると興味は人間のドラマにうつり、黒澤明監督や大島渚監督など巨匠の作品をよく観ていました。

また、当時、新人監督の登竜門的存在だったWOWOWの『Jムービーウォーズ』をはじめとするインディペンデントな若手作家たちの作品もむさぼるように観ていましたね。

この頃に見た作品のいくつかには私たちはとても影響を受けています。

私たちが進学した日本映画学校（現・日本映画大学）を創設した今村昌平監督の作品を初めて観たのもこの頃のことです。2年生のときに修学旅行で沖縄に行ったのですが、そのときに触れた「米軍基地とともに生きる沖縄の人たちの姿」に感じた不思議な感覚が、やがて沖縄のドキュメンタリー映画を製作することにもつながっているように思います。

◇専北生に伝えたいメッセージは何ですか

社会に出て、仕事をするようになると授業で習う勉強はもちろんですが、それ以外にも様々な経験が役に立ちます。ですから、授業以外の部分の経験値をどれだけ上げておくかが大事になります。

積極的に部活動や文化祭に携わり、「出来ること」を増やした方が良いと思います。

趣味や遊びも出来るだけ本気で取り組むと、意外なところで役に立つかもしれません。

私たちは趣味が映画作りしかなく、それ以外の経験値が圧倒的に不足していたので、日本映画学校の実習で脚本を書いたりする際には話の内容を深めることが出来ず、ちょっと苦労した部分があります。

ぜひ、反面教師にして頂ければ嬉しいです（笑）。

あと、私たちの場合は今でも高校時代にお世話になった先生方に応援してもらうことが多く、とても感謝しています。友達や先輩だけではなく、先生とのつながりも今から大切にしておいてください。

☆取材後記

突然の取材申込に、母校に協力出来ることならば、と笑顔で応じて下さった都鳥さん。

話が尽きることがなく、ご自身の紹介内容に加え、映画評論や作品づくりに関する熱い思いまでお話頂きました。中でも印象深かったのは、映画学校在学中に過ごした東京生活では、専大に進学した専北同級生との交流も大切にしていた、映画学校の先生や仲間と交流を深め様々な学びを得た、等のお話でした。

人との出会い・交流こそが良い仕事を完成させる秘訣なのだと感じました。（担当：Y）